12月日本生活学会の秋季研究会で発表したものを再度まとめたものである。

引用文献

注1　生活財生態学P30～33　商品科学研究所＋CID（1980.6）

注2　存在と意味　P393　　廣松　渉（1983）

地方に目立つというような若干地域差がみられる。また、台所の形態においても「K」形式では、たわし類、ラップ類、生ゴミ入が、「DK」形式では調味料類、やかん、ビン類、茶筒、保温ジャー、はし立て類、コップ立て、食品、食器乾燥機、パンケース、油こし、ナベつかみ、コーヒー類、きゅう須、はかり、トースター、ふきん類、ティシュ等が、「LDK」形式では電子レンジ、コーヒーメーカーが露出しやすいモノである。特に台所形式との関係ではその形式のもつ機能性が影響し、「K」形式においては調理機能の準備・片づけ段階で使うモノが、「DK」形式においては食事機能に関するモノが、「LDK」形式においては嗜好的でデザイン性のあるモノが露出しやすい。また、場所的には作業台廻りに調理器具小物類や炊飯器類が、冷蔵庫の上に小型電化製品が、食器戸棚の上に箱や缶類の不用品の類が、床にはゴミ箱や野菜入カゴ類の収納庫的なモノが置かれる傾向が強い。つまり地域、台所形式、場所により露出しやすい品目は影響をうける。

次に露出する理由として「使いやすい」という理由が第1位の理由にあげられているモノが多く、「しまうところがない」とする理由が「使いやすい」とする理由の割合に近似もしくは、それ以上であっても収納容積や台所の広さとはほとんど関係がみられない。しかも、特に「K」形式においては「DK」および「LDK」形式で「しまうところがない」とする理由が優先されるモノに対しても「使いやすい」とする理由が多い傾向にある。また、作業台廻りに露出しているモノは「使いやすい」とする理由が多いが、冷蔵庫や食器戸棚、床(作業台廻り以外)の上に置いてあるモノは「しまうところがない」とする理由が多く、「なんとなく」とする理由も多い。特に不用品や処分しきれないモノに対してこの傾向が強い。

そこで生活財生態学で大型生活財は空間の機能を決定する標徴種であり小型生活財はその空間の景観を分析する際に意義ありといわれる[注1]ところであるが台所においては小型生活財の中にも標徴種的なモノと景観的なモノの要素があるといえないだろうか。というのは生活財のスケールの大小によって建築空間に規制を与える以前に、歴史的に道具として空間を機能づけてきたといっても過言ではなかろうと考えるからである。つまりこの点において道具が第一次的には道具性において現前するということの重要な意義がある[注2]ということを認識するに至る。したがって、モノが置かれる場所に対して「使いやすい」と理由づけられるのはモノと場所が適合し、モノの道具性が十分に抽き出されていると考えられるのに対し「しまうところがない」(但し、収納容積と関係がみられないモノ)もしくは「なんとなく」と理由づけられるのはモノと場所が適合していないからであると考えられる。つまり、それらのモノに対して道具性が要求される必然性が弱く、景観的なデザイン性が要求されるようになるからである。**たとえば**、台所形式(空間の機能)と適合しないモノ、台所における道具として歴史の浅いモノ、台所において道具性を本来もたないモノ(処分しきれない箱や缶類)などが掲げられる。したがって、景観を云々する場合、これらのモノに対する収納のあり方が検討される必要があり、本来道具性を備えているモノに対しては台所の収納計画において使用上の便利性から生ずる露出をいかにするかを、外的要因との関係を考慮することによって、作業の効率化をはかるためのものになるようにするかが今後の課題である。今回は限定された調査対象であったが、調査対象を広げ台所におけるその露出するモノの存在の意味を探る研究を続ける予定である。

なお、本報告は日本女子大学沖田富美子氏との共同研究によって行なわれたもので、昭和58年

表17　2、3番目に露出しやすい場所に対する理由

理由／場所	「使いやすいから」	「しまうところがないから」	「なんとなく」
コンロガス置台上	炊飯器		
流し上	グラス、はし立て類、食器乾燥機		
調理台上	調味料、水切籠、やかん(ナベ)、ざる、ボール、ポット、まな板、電子レンジ、ジューサー、オーブン、保温ジャー、コップ立て、コーヒー類、油こし	(ナベ、やかん)(ざる)(ジューサー)	ナベ(ざる)
調理台廻り壁	ふきん、フライ返し、玉杓子、菜箸、ナベつかみ		
コンロ廻り壁	フライパン、フライ返し、玉杓子、菜箸、中華ナベ		
流し台廻り壁	ざる、フライパン、計量SC、ナベつかみ		
作業台廻りタナ	調味料、洗剤、やかん、箱、ボール、カゴ、食器カゴ、まな板、ラップ類、グラス、洗桶、コップ立て	箱	油こし
出窓	調味料、水切籠、ナベ、洗剤、ざる、ボール、はし立て類、漬物壷、中華ナベ		食器カゴ
作業台廻り収納タナ			
作業台廻り床	ゴミ箱、野菜入カゴ、バケツ	(ビン類)、野菜入カゴ(バケツ)	ビン類
床	生ゴミ入	漬物壷、袋類	
食器戸棚上	オーブントースター、袋類	はかり、トースター、ビン類ジューサー類、ダンボール食品	カゴ類、パンケース
冷蔵庫上	(本)	箱、(缶類)、(本)	缶類、(本)
食卓	電子ジャー、茶筒、コーヒーメーカー		お盆
収納タナ	食品、パンケース、コーヒーメーカー		
ワゴン	炊飯器、お盆、ポット、電子ジャー、ジューサー類、ラップ類、茶筒、保温ジャー	お盆、トースター、缶類、ラップ類、茶筒、カゴ	(お盆)、(缶類)、茶筒
器の上			
タナ(壁)		(ダンボール)	蒸し器、ダンボール
その他	炊飯器、お盆、電子ジャー、カゴ類、電子レンジ、オーブン、茶筒、食器カゴ		

※(　)のモノは理由割合が近似である場合

表16　モノが一番露出しやすい場所

場所 / 露出率	コンロ上	流し上	調理台上	コンロ壁	流壁	作業台廻りタナ	出窓	作業台廻り収納タナ	作業台廻り床	床	食器戸棚上	冷蔵庫上	食卓	収納タナ	ワゴン上	器の上	その他
50%以上	やかん	水切籠 洗剤 たわし類	炊飯器		ふきん	ナベ ざる ボール					箱		調味料				
50%未満～40%以上										米びつ	お盆						
40%未満～30%以上		まな板	電子ジャー		フライ返し 玉杓子	フライパン				ゴミ箱 野菜入カゴ		はかり トースター	ポット				
30%未満～15%以上										ビン類 タンボール	缶類	電子レンジ オーブントースター ジューサー					
15%未満～10%以上		洗桶			菜箸		コップ立て				茶筒 カゴ ラップ類	天火	カゴ類 はし立て類				保温ジャー
10%未満～0.5%以上		食器カゴ	食器乾燥機	ナベつかみ	しゃもじ 淡立器	蒸し器 中華ナベ 包丁 ティシュ	グラス 油こし ティシュ	ティシュ	漬物壺 生ゴミ入	バケツ 油	コーヒーメーカー袋 ティシュ コーヒー類		急須	袋類 ティシュ	バンケース 食品	ティシュ	ティシュ

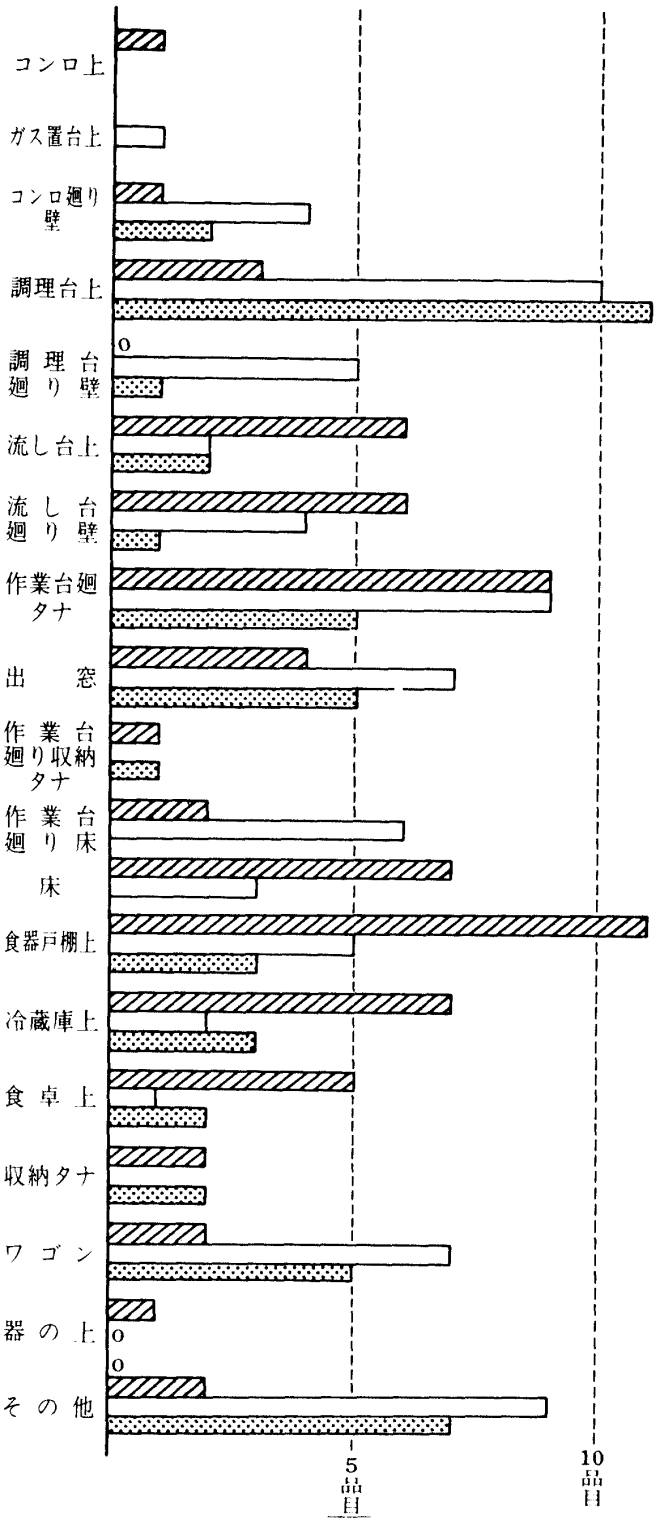
露出しているモノの多くは「しまうところがない」という理由からである。

Ⅳ　まとめ

台所の収納空間を計画するにあたって、台所に関連したモノがどの程度収納されずに使われているかの実態、また露出しやすいモノの傾向ならびに要因を把握することを目的に検討を試みた。その結果をまとめると以下のようになる。

各世帯の台所に露出している品目数は最低2個から最高35個まで多種にわたっており、平均露出品目数は17.4個で実際には一品目に対して種類があるのでそれより多い個数が露出していることになる。また約5割以上の世帯の台所で露出しているモノに調味料類、水切籠、鍋類、洗剤類、やかん、たわし類、炊飯器、箱、ざる類、ボール類、ふきん等の11品目がある。

このように露出しているモノの量は台所の広さ、作業台間口、収納容積、主婦年齢にやや影響をうける。なお露出しやすいモノにオーブントースター、ジューサー類、オーブン（天火）等の電化製品類やお盆、ラップ等で首都圏に多く、野菜入カゴ、電子ジャー、洗い桶、中華ナベ等は、



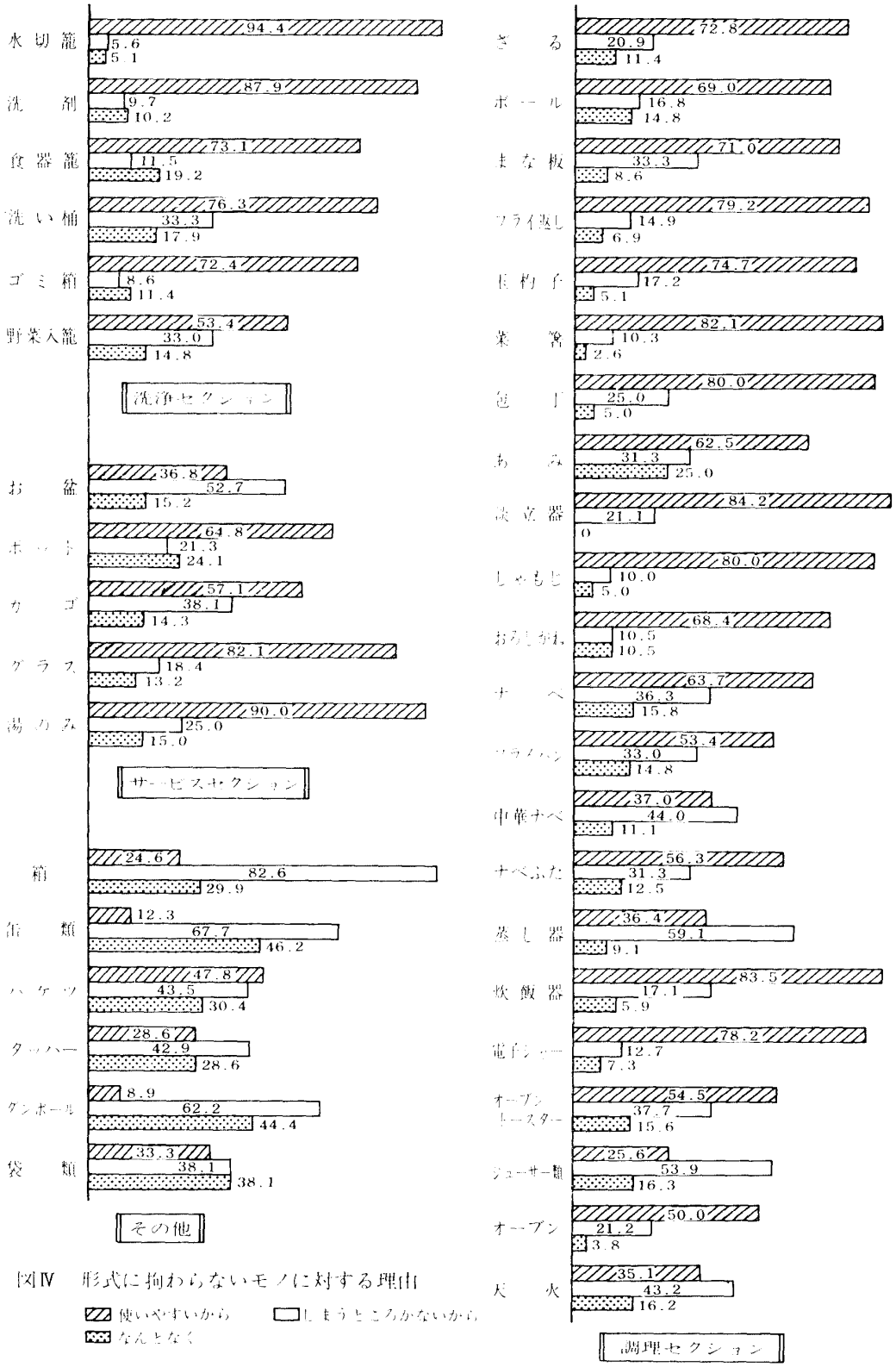
図V　優位順にみた露出しやすい場所における品目数

は収納容積があっても「使いやすい」という理由が優先する傾向が強いのに対し、「DK」および「LDK」形式では、しまおうという意識が強くなり、その結果「しまうところがない」という理由の方を優先する傾向がみられる。

(4)露出しているモノとその場所

台所のどの場所にモノが露出しているかを、露出しやすい場所の第1位から第3位までを図Vに示す。図より最も露出しやすい場所は食器戸棚の上、作業台廻りの棚、床、冷蔵庫の上、流し台とその廻りの壁であり、次に調理台廻り、特に調理台の上、出窓、ワゴンなどとなっている。どのようなモノがどの場所に露出しているのかを表16に示す（但し、露出している場所第1位のみ）。流し台の上には、たわし類、洗剤、まな板などが、流し壁廻りには調理器具小物―フライ返し、玉杓子、菜箸、漉立器、ふきん類が、調理台の上には炊飯器、電子ジャー、食器乾燥機、作業台廻りの棚にはナベ、ざる、ボールなどの調理器具、冷蔵庫の上にはオーブン、ジューサー類、はかりなどの小型電化製品類、食器戸棚の上には箱、お盆、缶類などの処分しきれない中途半端なモノが置かれ、床には米びつ、野菜入カゴ、ゴミ箱、ダンボール、ビン類などの比較的場所をとるモノや収納庫的なモノが置かれている。

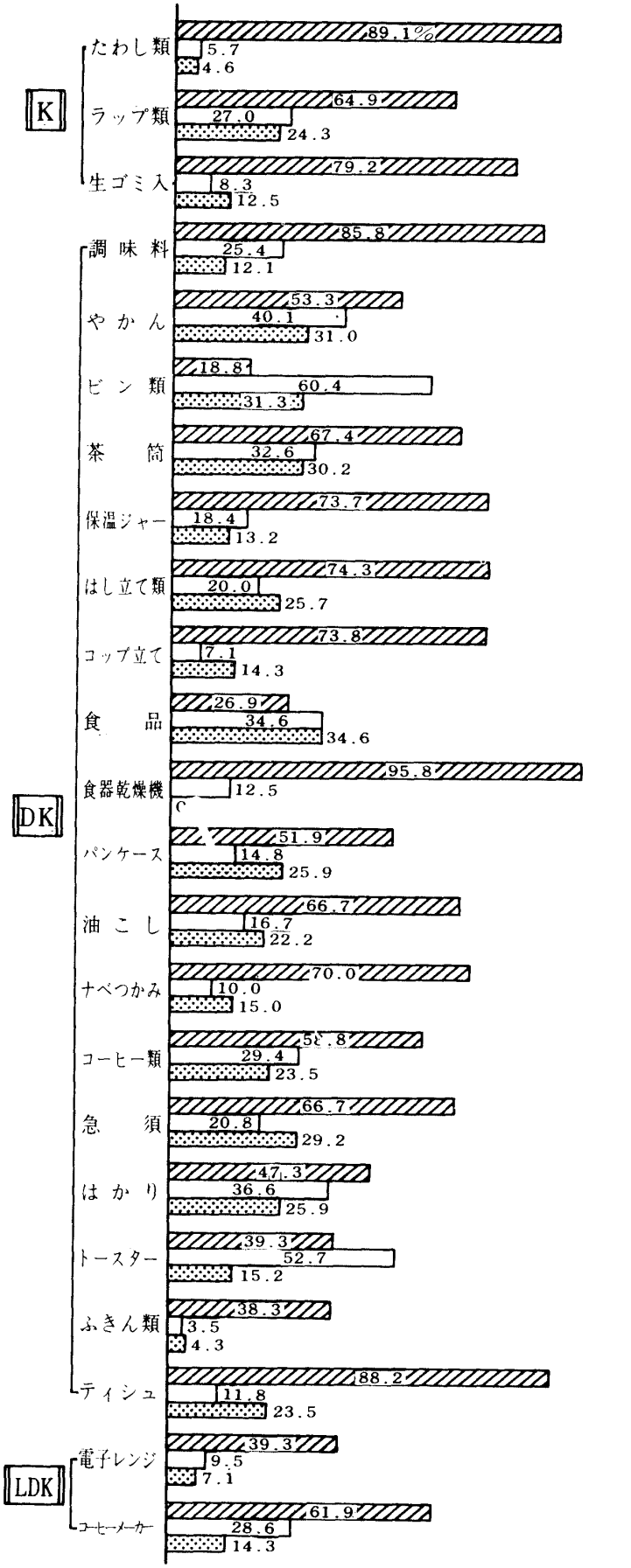
次にモノが露出しやすい場所とその理由との関係を表17に示す（但し、露出している場所第2、3位について）。なお、表16においては無印のモノは「使いやすい」、○で囲まれたモノは「しまうところがない」とする理由が第1位の理由にあげられたもの。・がついたモノは、「使いやすい」と「しまうところがない」とする理由が同数の割合のものを示す。これらの表より、コンロ、流し、調理台、棚、床、壁の一連の作業台廻りに露出しているモノのその理由は圧倒的に「使いやすい」である。ところが、食器戸棚、床（作業台廻りから離れた場所）、冷蔵庫の上に



図Ⅳ　形式に拘わらないモノに対する理由

の課題の一つである。

以上、台所に露出しているモノの多くは「使いやすい」が第1の理由にあげられている。また「使いやすい」という理由が「しまうところがない」という理由を若干でも上回わるモノについては収納容積の大小との関係はほとんどみられることなく露出しているのが現状であり、そのままでよいとする向きがある。しかし、台所形式別にみた場合、露出しているモノに対して「K」形式で



図III　形式に拘わるモノに対する理由

■対しても強く働いているようである。ナベ類は小物器具と同じように「使いやすい」という理由をあげるものが多いが、中華ナベや蒸し器などに対しては「しまうところがない」という理由をあげるものの方が多くなっている。電化製品類では炊飯器、電子ジャー、オーブントースター、オーブンは「使いやすい」という理由があげられるが、ジューサー類のような嗜好的なモノについては「しまうところがない」とする割合が多くなっている。その原因として台所の広さ、収納容積との関係はほとんどみられない。というのは面積も広く収納容積も大きい場合に露出しているケースがあるからである。ただし、若干、食器戸棚の容積が小さい場合に露出する傾向がややみられる。なお、電化製品に対しては「使いやすい」という理由をあげるものが「K」形式より「DK」形式に多いのが特徴的である。次にサービスセクションで使われるポット、カゴ、グラス、湯呑に対しては「使いやすい」という理由が、お盆に対しては「しまうところがない」という理由が第1位にあげられている。その他、前述の3セクションに該当しないモノの一つであるバケツは「使いやすい」という理由が、また箱、缶類、タッパー、ダンボール、袋類など用途が明確でないモノに対しては「しまうところがない」という理由が多くあげられている。なお、全体的に「なんとなく」という理由をあげるものが多いことに注目したい。これらの「なんとなく」という理由で露出しているモノをいかに収納と結びあわせるかが、今後

表15　露出しているモノに対する使用者の意識（第一の理由）

理由＼モノ	割合が高い順(30%以上の主婦が意識したモノ)
「使いやすいから」	食器乾燥機(95.8)　水切籠(94.4)　たわし類(89.1)　洗剤(87.9)　調味料(85.8)　炊飯器(83.5)　グラス(82.1)　菜箸(82.1)　フライ返し(79.2)　電子ジャー(78.2)　洗桶(76.9)　包丁・しゃもじ(80.0)　玉杓子(74.7)　はし立て類(74.3)　コップ立て(73.8)　保温ジャー(73.7)　食器カゴ(73.1)　ざる(72.8)　まな板(71.0)　ナベつかみ(70.0)　ボール(69.0)　茶筒(67.4)　きゅう須(66.7)　ラップ類(64.9)　ポット(64.8)　ナベ(63.7)　コーヒーメーカー(61.9)　オーブルトースター(54.5)　カゴ(57.1)　野菜入籠(53.4)　フライパン(53.4)　やかん(53.3)　パンケース(51.9)　オーブン(50.0)　バケツ(47.8)　はかり(47.3)
「しまうところがないから」	箱(82.6)　缶類(67.2)　ダンボール(62.2)　ビン類(60.4)　蒸し器(59.1)　ジューサー類(53.9)　トースター(52.7)　漬物壺(48.0)　中華ナベ(44.4)　お盆(43.9)　バケツ(43.5)　天火(43.2)　やかん(40.1)　袋類(38.1)　カゴ(38.1)　オーブントースター(37.7)　はかり(36.6)　食品(34.6)　野菜入籠(33.0)　フライパン(33.0)
「なんとなく」	缶類(46.2)　ダンボール(44.4)　お盆(41.2)　袋類(38.9)　食品(34.6)　ビン類(31.3)　やかん(31.0)　バケツ(30.4)　茶筒(30.2)　箱(29.9) 漬物壺(28.0)　パンケース(25.9)　はし立(25.7)

「なんとなく」という理由も多い。またトースターは「しまうところがない」という理由が多いが「使いやすい」という理由も多くなっている。

そこで「しまうところがない」という理由が多かったものについて台所の広さと収納容積が一つの要因となっていると仮定し両者の関係をみると、その結果、食品とビン類に関しては収納容積とはあまり関係がないのに対し、トースターは若干収納容積が小さい世帯にこの理由をあげるものが多いことから、量的な収納不足が原因になっているといえよう。しかし第2の理由に「使いやすい」が多くなっていることを考えると一概に断定はできない。

次に台所形式に拘わらず、どの形式にも露出しているモノについて検討する。今、考察を容易にするべく露出しているモノを台所内での場所、及び用途上一括できると考え、洗浄・調理・サービスの3つのセクションに分ける。その分類を図Ⅳに示す。まず、洗浄セクションの水切カゴ、洗剤、食器カゴ、ゴミ箱、洗い桶などは「使いやすい」という理由をあげる割合が一番高く、次に「なんとなく」という理由をあげるものが多い。調理セクションでは小物器具等に対してはすべて「使いやすい」が第1の理由としてあげられているが、まな板、あみについては「しまうところがない」という理由も多い。なお、これらの露出は収納容積の大小には関係がみられない。つまり洗浄セクションにおけるモノ同様に「使いやすい」という理由が調理セクションのモノに

ジャー、洗い桶、中華ナベ等が多く露出している。

次に台所の形態に拘わるモノとして、台所の形式別に露出しているモノをその頻出順に表14に示す。表より「K」形式の台所形態に拘わるモノとしては調理行為（下ごしらえ・後片づけの段階）で使う道具—特に水廻りにおける準備、保存、処理に関するモノ—が目立っている。また「DK」形式では、「K」形式で比較的少ない調理行為の調理段階で使う道具—熱処理に関するモノ—が多く露出している。特に保温ジャー、はし立て、ビン類、コップ立てのような食事行為に関する道具の多いのが目立つ。次に「LDK」形式では調理行為の搬出段階の道具や手軽な電化製品、食品類の露出が多い。中でも電化製品による簡易・嗜好的なモノが目立っている。なお、台所の形態に拘わらないモノとして調理小物器具、鍋類、後片づけのための道具、電化調理器具、サービスのための道具、処分できないモノ等である。つまりいずれの台所形式にあっても日常的なモノであり露出してしまいがちなモノであるといえよう。そこで各台所形式別に露出しているモノを具体的にまとめると次のようになる。

「K」形式……たわし類、ラップ類、生ゴミ入

「DK」形式……調味料類、やかん、ビン類、茶筒、保温ジャー、はし立て類、コップ立て、食品、食器乾燥機、パンケース、油こし、ナベつかみ、コーヒー類、急須、はかり、トースター、ふきん類、ティシュ

「LDK」形式……電子レンジ、コーヒーメーカー

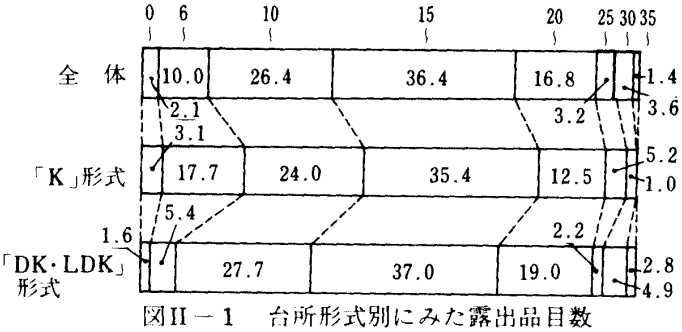
どの形式にも拘わらないモノ…ざる類、ボール類、お盆、ポット、電子ジャー、ゴミ箱、まな板、フライパン、オーブントースター、フライ返し、缶類、玉杓子類、オーブン（天火）、カゴ、菜箸、野菜入カゴ、バケツ、中華ナベ、食器カゴ、包丁、あみ、淡立器、しゃもじ、ナベぶた、おろしがね、タッパー、ジューサー類、グラス、洗い桶、水切籠、洗剤類、ナベ類、炊飯器、箱、袋類、湯のみ、蒸し器、ダンボール

(3)露出品目とその露出理由

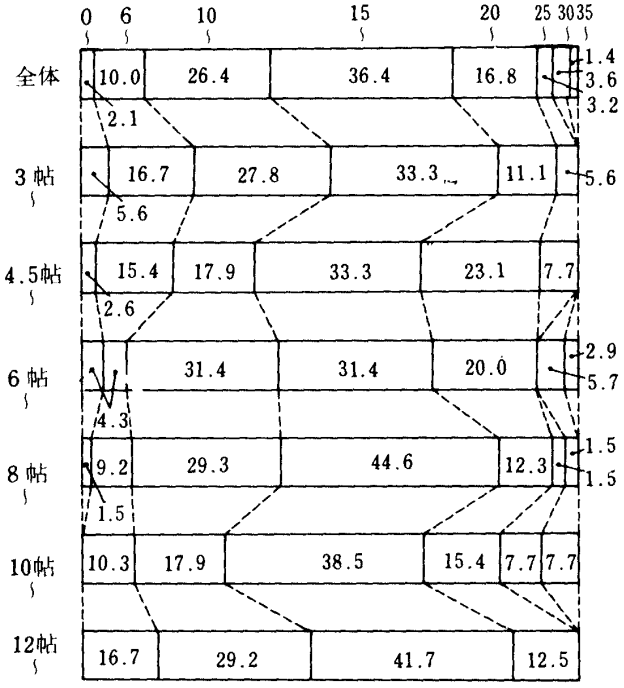
露出している品目に対する使用者の理由を表15に示す。これは露出品目に対して30%以上の主婦が理由としたモノ50品目についてである。そのうち37品目に対して「使いやすい」、13品目に対しては「しまうところがない」が第一の理由にあげられている。さて、台所形式に拘わるモノに対する露出する理由を図Ⅲに示す。「K」形式では露出していたモノに対する理由がすべて「「使いやすい」を第一位にあげる割合が高く、「しまうところがない」と「なんとなく」をあげる割合は低く近似している。つまり「K」形式としての台所ではこれらの品目（たわし類、ラップ類、生ゴミ入）に対して、しまうという意識があまりみられないといえよう。「DK」形式では18品目中15品目が「使いやすい」という理由から露出しているが、食品類については「しまうところがない」と「なんとなく」という理由が同割合で、ビン類は「しまうところがない」という理由が一番多いが、

表14　台所形式別に露出しているモノの割合

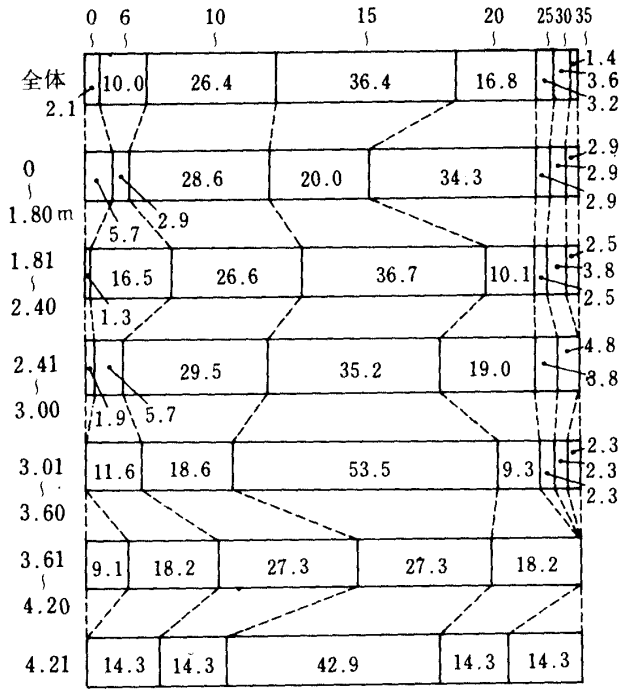
露出率＼形式	「K」	「DK」	「LDK」
80%		85.0　調味料類	88.2　調味料類　水切籠
70%	75.0　水切籠　調味料類 71.9　ナベ	71.3　水切籠 70.7　やかん	82.4　ナベ　洗剤 70.3　やかん　炊飯器
60%	62.5　たわし類 61.5　洗剤	68.9　洗剤 67.1　ナベ 66.5　炊飯器 61.1　たわし類	
50%	59.4　やかん 56.3　炊飯器　箱	55.7　箱 50.3　ざる	58.8　箱
40%	49.0　ざる 42.7　ボール	48.5　ボール 46.1　ポット 43.7　電子ジャー 40.7　トースター 40.1　はかり	47.1　たわし類　はかり　お盆　トースター　ポット 41.2　ボール　電子レンジ　カゴ類　オーブントースター
30%	36.5　お盆 35.4　はかり 31.3　まな板　ゴミ箱 30.2　トースター	38.9　お盆 31.7　フライパン	35.3　ざる　ゴミ箱
20%	27.1　カゴ類 25.0　電子ジャー　フライパン　ふきん類 24.0　オーブントースター 21.9　玉杓子 20.8　缶類 20.0　ラップ類	29.3　カゴ類 27.5　まな板　フライ返し 26.9　オーブントースター　ふきん類 22.1　缶類 21.0　米びつ 20.4　茶筒	29.4　茶筒　缶類 23.5　まな板　米びつ　コーヒーメーカー
10%	19.8　ポット 17.7　米びつ　電子レンジ 16.7　フライ返し　ジューサー類 15.6　洗桶 14.6　茶筒　グラス 12.5　ビン類　油 11.5　漬物壺　オーブン 10.4　保温ジャー　コップ立て　はし立て類 計量S.C	19.2　ビン類 18.6　電子レンジ 18.0　オーブン 16.8　玉杓子 16.2　保温ジャー 15.6　はし立て類 15.0　コップ立て 14.4　ジューサー類 13.2　グラス　ダンボール 12.1　ラップ類　天火　カゴ 11.4　食器乾燥機 10.8　洗桶　漬物壺　菜箸　食器　野菜入カゴ 10.2　パンケース	17.6　電子ジャー　ジューサー類 11.8　玉杓子　オーブン　ラップ類　保温ジャー　洗桶　ダンボール　天火　漬物壺　パンケース
5%	9%代　野菜入カゴ 8%代　天火　カゴ　菜箸　生ゴミ入 7%代　蒸し器　バケツ　食器籠　タッパー　すり鉢	9%代　中華ナベ　バケツ　油こし　ナベつかみ 7%代　食器カゴ　生ゴミ入　本　包丁　あみ　急須	5%代　カゴ　菜箸　食器　食器乾燥機　バケツ　食器類　生ゴミ入　油こし　包丁



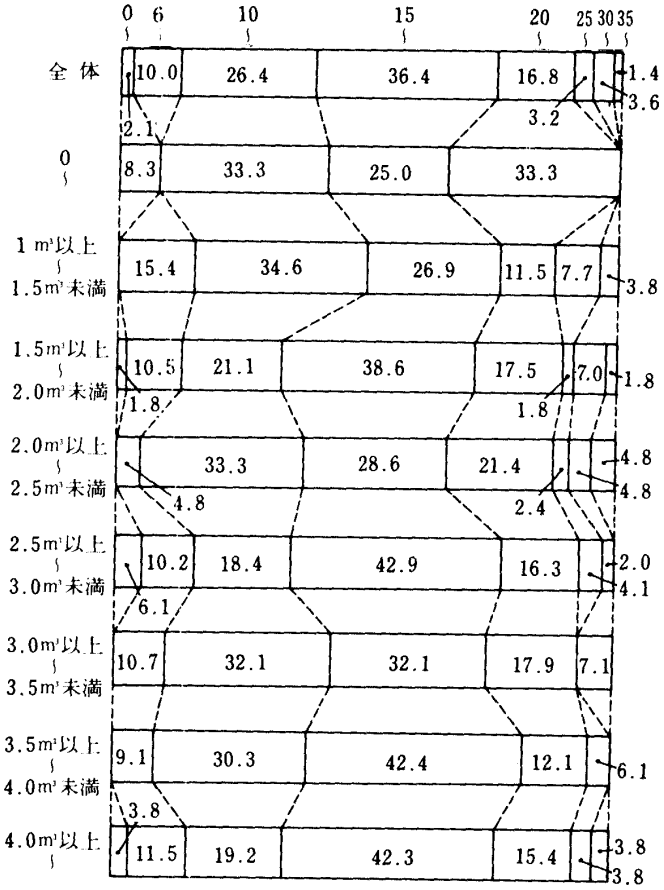
図II－1　台所形式別にみた露出品目数



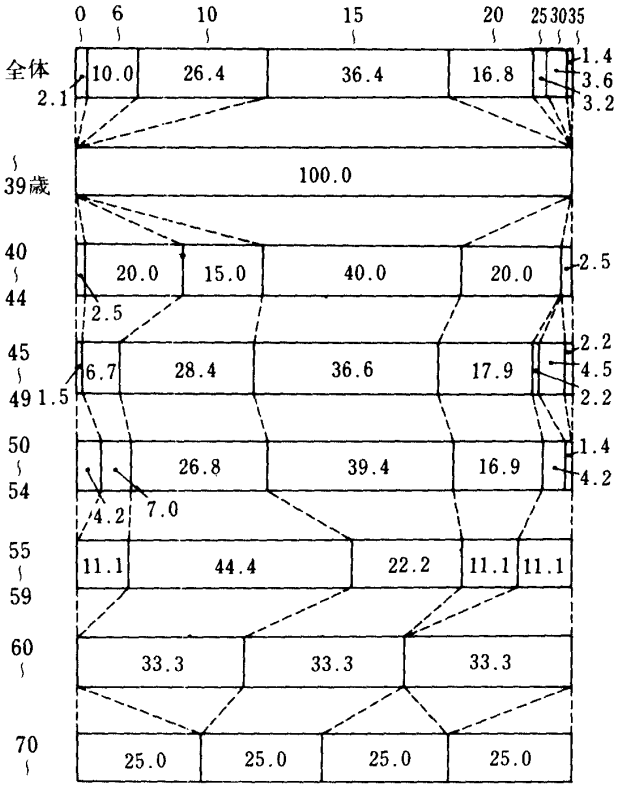
図II－2　台所の広さ別にみた露出品目数



図II－3　作業台間口別露出品目数



図II－4　収納容積別露出品目数



図II－5　主婦の年齢別にみた露出品目数

表12　露出しているモノ

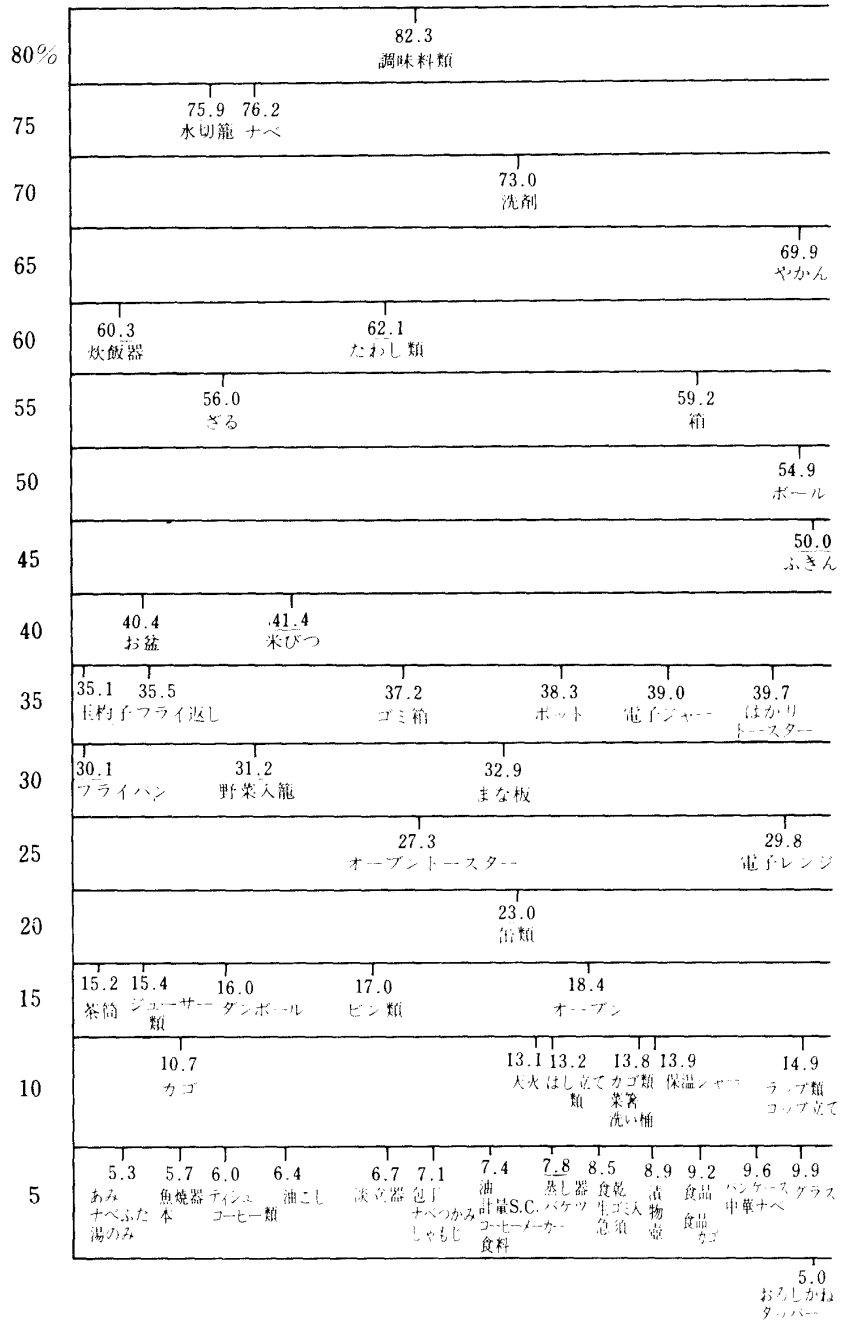


表13　露出しているモノ（地域別）

地域＼露出率		50%	40%	30%	20%	10%	5%代
首都圏	東京		米びつ お盆		オーブントースター	ジューサー類 ラップ類 菜箸　天火	漬物壺　急須 バケツ　計量S.C. コーヒーメーカー　ナベつかみ
	他	箱		はかり フライパン			
地方		箱	米びつ	電子ジャー 野菜入カゴ	（電子レンジ）	ダンボール 洗い桶	中華ナベ　蒸し器　包丁 食品　食乾、生ゴミ入

分布をみると「15～19個」が36.4％で最も多く、「10～14個」が26.4％、「20～24個」が16.8％、「9個以下」が12.1％、「25個以上」が8.2％となっている。

そこで露出品目数が何によって影響を受けているかを知るべく、台所形式、台所の広さ、台所作業台間口、収納容積、主婦の年齢などをその要因と仮定し分析した結果を図II－1～5に示す。まず台所形式との関係についてみると「K」形式では9個以上の世帯が多く、「DK」および「LDK」形式では10個以上の世帯が多くなっている。しかしいずれの形式においても露出品目数の多少にはそれほど変化がみられない。次に台所の広さとの関係についてみると、3帖では露出品目数14個以下という世帯が5割を占め、4.5帖では20個以上の世帯が多いのに対し、6帖では「10～14個」とする世帯が多く、「10～19個」の露出品目数の世帯が全体の6割強を占める。さらに8帖と12帖では「10～19個」とする世帯が他の広さより多く「20個以上」とする世帯が少ないのが特徴である。10帖の場合は、4.5帖とほぼ同様な傾向がみられる。以上の結果、「K」形式の場合、3帖の狭い台所では露出品目数は比較的少ないが広くなるに従い露出品目数がやや多くなる傾向があるが、「DK」および「LDK」形式のように調理機能の他に食事・団らん等の機能がとりいれられた台所形態においては広さの狭い方が露出品目数が多くなる傾向が見られる。

次に作業台間口の長さとの関係をみると作業台間口が短かい「1.8m以下」の場合は、平均露出品目数の17.4個より多めの「20個以上」とする世帯が多い。間口「1.81m以上3.00m以下」の場合は露出品目数による変化がみられないのに対し、間口「3.01m以上3.60m以下」は平均露出品目数の近似の「15～19個」とする世帯が約半数を占め、露出品目数19個以下で8割強が占められている。間口「3.61m以上4.10m以下」ではむしろ「14個以下」という世帯が多く、「25個以上」露出している世帯は皆無である。以上より、作業台間口が長く、モノを置くのに丁度よいスペースがあるからといって露出品目数が多くなるのではなく、かえって短かい場合の方が露出品目数が増加する傾向がある。

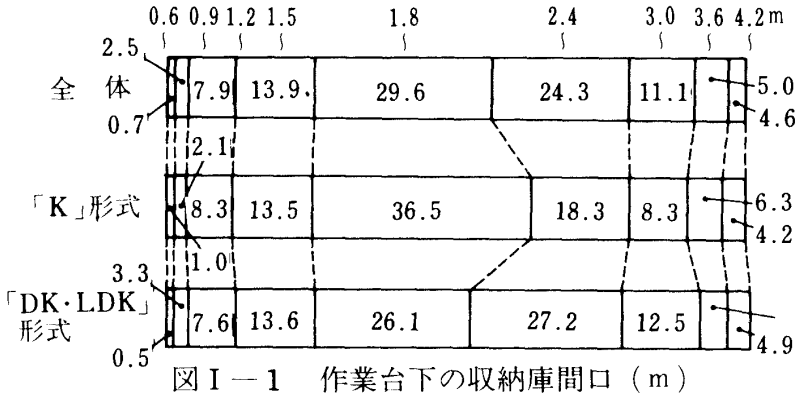
そこで、収納容積との関係をみると、容積が1㎥未満の場合、露出品目数「20個以上」が多い。「1㎥以上2.5㎥未満」の容積では露出品目数「14個以下」が多く、収納容積が増大するとともに露出品目数「20個以上」の世帯が増える傾向がみられる。ところが「2.5㎥以上」の容積では、それぞれの露出品目数の割合には変化がみられない。以上より収納容積 2.5㎥未満までは露出品目数の多少は収納容積により影響をうけるといえよう。

さらに、主婦の年齢別に露出する品目数をみると露出品目数「15個以上」とする世帯が50歳代前半の若年層に多い。50歳代後半では、他の年代に比べやや露出品目数が少ないのに対し、60歳代以上では露出品目数「20個以上」とする世帯の割合が増加している。

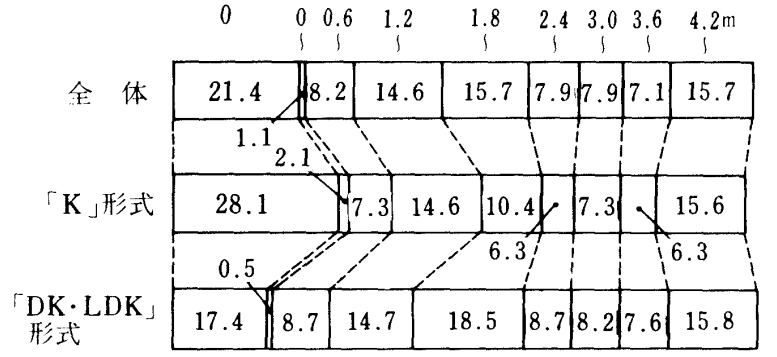
(2)露出しているモノ

台所に露出しているモノが（ここでは調査対象5％以上の台所で露出しているモノをいう）どのような要因とかかわりあって露出しているかを、地域性、台所形式、使用者の意識、モノが置かれている場所の4点から分析考察する。まず首都圏および地方により、その露出している品目の違いをみると表13に示すように首都圏ではオーブントースター、ジューサー類、天火等の電化製品やお盆、ラップ類等の露出が地方より多くなっているのに対し、地方では、野菜入カゴ、電子

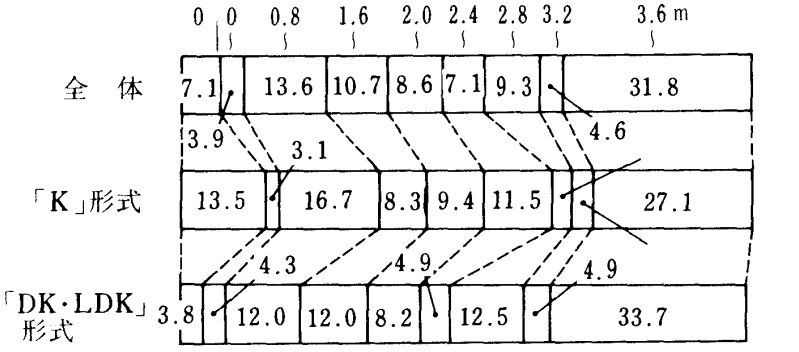
吊戸棚、食器戸棚を総合した全収納容積を表11に示す。表より「1.5m³以上2.0m³未満」が20.4%で一番多く、「2.5m³以上3.0m³未満」が17.5%、「2.0m³以上2.5m³未満」が15.0%となっており全体の半数が「1.5m³以上3m³未満」に集中している。また地方の方が首都圏より収納の容積が大きい台所が多い。次に台所形式と各収納容積との関係をみる（図Ｉ－１～３参照なお高さ、奥行を一定にして容積の大きさを間口で表わしている）。まず作業台下の収納スペース容積は、「ＤＫ」形式では、間口2.4m以上の世帯が多いのに対し、「Ｋ」形式では間口2.4m未満が多くなっている。中でも、「Ｋ」形式では間口「1.8m以上 2.4m未満」が多い。次に吊戸棚の容積については「ＤＫ」および「ＬＤＫ」形式では間口 0.6m以上の世帯が多く、「Ｋ」形式では 0.6m未満の世帯が多い。食器戸棚の容積は「ＤＫ」および「ＬＤＫ」形式の場合は間口 2.8m以上が多く、「Ｋ」形式では間口2.8m未満が多い。なお、台所全体の収納容積としてまとめると図Ｉ－４のようになる。図より「ＤＫ」および「ＬＤＫ」形式の方が容積2.0m³以上とする世帯が「Ｋ」形式よりも多くなっており、収納容積は台所形式とやや関連がみられる。



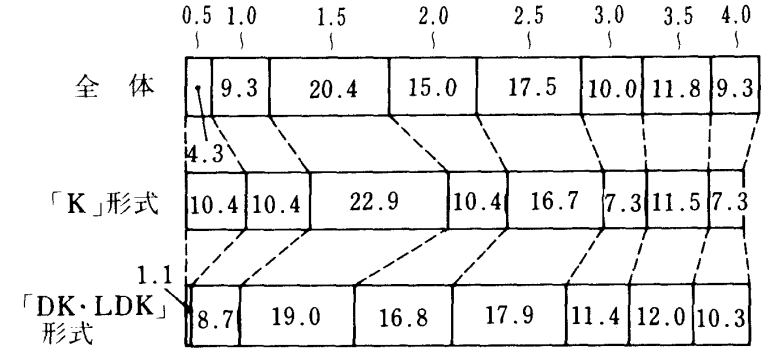
図Ｉ－１　作業台下の収納庫間口（m）



図Ｉ－２ 台所形式別にみた吊戸棚の間口（m）



図Ｉ－３ 台所形式別にみた食器戸棚の間口（m）



図Ｉ－４ 台所形式別にみた収納容積（m³）

２．台所に露出しているモノ

(1)露出品目数

台所に露出しているモノは図面から抽出した結果 159品目に及ぶ。表12に示すように調査対象世帯の５%以上の台所で露出しているモノは69品目、約半数の世帯の台所で露出しているモノは11品目である。全体的に調理器具に属するモノが露出している。各世帯の台所で露出しているモノの品目数は最低２個から最高35個までと多種にわたっており一世帯あたり平均露出品目数は17.4個である。また露出品目数の

できるような形態になっていないものがあるので作業台下の収納スペースの間口は作業台間口より幾分短かめである。すなわち表8に示すように「1.8m以上2.4m未満」が29.6%となり一番多

表8　作業台下の収納庫間口（高さ×奥行＝0.8m×0.55m）　（ ）は%

地域＼間口	0.6m以上～0.9m未満	0.9m以上～1.2m未満	1.2m以上～1.5m未満	1.5m以上～1.8m未満	1.8m以上～2.4m未満	2.4m以上～3.0m未満	3.0m以上～3.6m未満	3.6m以上～4.2m未満	4.2m以上～
全体	2(0.7)	8(2.9)	22(7.9)	39(13.9)	83(29.6)	68(24.3)	31(11.1)	14(5.0)	13(4.6)
首都圏	0	3(2.8)	11(10.2)	19(17.6)	33(30.6)	25(23.1)	11(10.2)	3(2.8)	3(2.8)
地方	2(1.2)	5(2.9)	11(6.4)	20(11.6)	50(29.1)	43(25.0)	20(11.6)	11(6.4)	10(5.8)

く、次に「2.4m以上3.0m未満」が24.3%、「1.5m以上1.8m未満」が13.9%とつづいている。吊戸棚の間口については表9に示すように吊戸棚が全くない台所が21.4%あり、しかもこの率が

表9　吊戸棚の間口（高さ×奥行＝0.5m×0.4m）　（ ）は%

地域＼間口	0	0～0.6m未満	0.6m以上～1.2m未満	1.2m以上～1.8m未満	1.8m以上～2.4m未満	2.4m以上～3.0m未満	3.0m以上～3.6m未満	3.6m以上～4.2m未満	4.2m以上～
全体	60(21.4)	3(1.1)	23(8.2)	41(14.6)	44(15.7)	22(7.9)	22(7.9)	20(7.1)	44(15.7)
首都圏	12(11.2)	1(0.9)	11(10.3)	19(17.8)	27(25.2)	7(6.5)	9(8.4)	5(4.7)	16(15.0)
地方	48(27.9)	2(1.2)	12(7.0)	22(12.8)	17(9.9)	15(8.7)	13(7.6)	15(8.7)	28(16.3)

一番多い。その他「1.8m以上2.4m未満」と「4.2m以上」の長さの吊戸棚が多くなっている。これを地域別にみると首都圏において特に、東京では吊戸棚の間口が長めの「1.8m以上3.6m未満」の台所が多く、地方では吊戸棚がないか、あるいは比較的長い4.2m以上の吊戸棚間口の台所が多い。食器戸棚の間口は表10に示すように「3.6m以上」が31.8%となり、「0.8m以上1.6m未

表10　食器戸棚の間口（高さ×奥行＝0.9m×0.4m）　（ ）は%

地域＼間口	0	0～0.8m未満	0.8m以上～1.6m未満	1.6m以上～2.0m未満	2.0m以上～2.4m未満	2.4m以上～2.8m未満	2.8m以上～3.2m未満	3.2m以上～3.6m未満	3.6m以上～
全体	20(7.1)	11(3.9)	38(13.6)	30(10.7)	24(8.6)	20(7.1)	26(9.3)	13(4.6)	89(31.8)
首都圏	6(5.7)	4(3.8)	16(15.2)	10(9.5)	15(14.3)	7(6.7)	9(8.6)	6(5.7)	32(30.5)
地方	14(8.1)	7(4.1)	22(12.8)	20(11.6)	9(5.2)	13(7.6)	17(9.9)	7(4.1)	57(33.1)

満」が13.6%、「1.6m以上2m未満」が10.7%とつづいている。さらに作業台下の収納スペース、

表11　収納容積　（ ）は%

地域＼総容積	0～1.0m³未満	1m³以上～1.5m³未満	1.5m³以上～2.0m³未満	2.0m³以上～2.5m³未満	2.5m³以上～3.0m³未満	3.0m³以上～3.5m³未満	3.5m³以上～4.0m³未満	4.0m³以上～
全体	12(4.3)	26(9.3)	57(20.4)	42(15.0)	49(17.5)	28(10.0)	33(11.8)	26(9.3)
首都圏	3(2.9)	12(11.5)	24(23.1)	20(19.2)	18(17.3)	9(8.7)	9(8.7)	9(8.7)
地方	9(5.2)	14(8.1)	33(19.2)	22(12.8)	31(18.0)	19(11.0)	24(14.0)	17(9.9)

表2に示すように調査対象住宅は一戸建住宅が90.7%と圧倒的に多く、集合住宅居住者は1割に満たない。次に住宅面積は表3に示すように60m²以上300m²未満におよび中でも120m²以上150m²未満の住宅が最も多く平均住宅面積は148.6m²とかなり広い。特に地方においては150m²以上の世帯が3割強を占めているのに対し120m²未満が首都圏に多いのが特徴である。居住年数は(表4参照)11年以上15年以下が一番多く、ここ15年間に現在の住宅に住み変えた家庭が約半数である。なお、台所の改造については全体の3分の1の世帯が行っているがその約8割は居住年数が15年以上の住宅である。

表4　居住年数

	0～5年以下	6年以上～10年以下	11年以上～15年以下	16年以上～20年以下	21年以上～30年以下	31年以上～
件数	49	52	61	34	44	40
%	17.4	18.5	21.7	12.1	15.7	14.2

III　調査結果

1．台所の現状

(1)台所の形式と広さ

まず、台所の形式を表5に示す。台所の形式は全体的にみると「DK」形式が59.4%で最も多い。特に地方では「DK」形式が多いのに対し、首都圏では「LDK」形式が多くなっている。次に台所の広さを表6に示す。台所形式と関連させてみると、「K」形式では4.5帖以下「DK」形式では6帖以上8帖以下、「LDK」形式では12帖以上の世帯が各形式において半数以上を占めている。また作業台の配列は「I列型」が79.3%で最も多く、次に多い「L列型」は17.5%にすぎない。

表5　台所の形式　　( )は%

形式＼地域	全　体	首都圏	地　方
「K」	96(34.2)	36(33.6)	60(34.7)
「DK」	167(59.4)	60(56.1)	107(61.8)
「LDK」	17(6.0)	11(10.3)	6(3.5)

表6　台所の広さ　　( )は%

帖数＼形式	全　体	「K」	「DK」	「LDK」
3帖以上	18(6.4)	18(18.8)	0	0
4.5帖以上	39(13.9)	33(34.4)	5(3.0)	0
6帖以上	70(24.9)	18(18.9)	51(30.5)	0
8帖以上	65(23.1)	11(11.5)	53(31.7)	1(5.9)
10帖以上	39(13.9)	4(4.2)	30(18.0)	5(29.4)
12帖以上	24(8.5)	3(3.1)	12(7.2)	9(52.9)

(2)台所の収納スペース

作業台間口は表7に示されるように「2.41m以上3.00m以下」が37.5%で一番多く、次に「1.81m以上2.40m以下」が28.2%、「3.01m以上3.60m以下」が15.4%となっており、3.0m以下の作業台間口の台所が約8割を占める。これを地域別にみると、地方では3.01m以上、首都圏では2.40m以下の作業台間口が多い。次に作業台下の空間は必ずしも収納

表7　台所の作業台間口　　( )は%

地域＼間口	～1.80m以下	1.81m以上～2.40m以下	2.41m以上～3.00m以下	3.01m以上～3.60m以下	3.61m以上～4.19m以下	4.20m以上～
全　体	35(12.5)	79(28.2)	105(37.5)	43(15.4)	11(3.9)	7(2.5)
首都圏	17(15.7)	35(32.4)	41(38.0)	12(11.1)	2(1.9)	1(0.9)
地　方	18(10.5)	44(25.6)	64(37.2)	31(18.0)	9(5.2)	6(3.5)

II　調査方法および調査対象世帯の概要

1．調査方法

某女子大学の学生の家庭を対象に台所廻りの平面図及び展開図作成（台所の景観をなしているところの家具・モノを記入）を含むアンケート調査を昭和57年1月に行なう。調査票配布数は319件、有効調査票は281件である。

2．調査対象世帯および住宅の概要

表1　調査対象家族の属性

主人の年齢	50歳代前半　53.0%　　平均　50.5歳
主婦の年齢	40歳代後半　49.3%　　平均　48.2歳
家族人数	4人　46.7%　　5人　26.3%
子供数	2人　62.7%　　3人　20.6%
主人の職業	管理職　49.5%　　事務職　24.9%
核家族の割合	77.4%
専業主婦の割合	63.0%
地域性	首都圏　39.4%(このうち東京18.9%)　　地方　61.6%

調査対象世帯の属性を表1に示す。表より調査対象家族の平均人数は4.3人であり老人が同居している家庭は2割である。世帯主である主人は50代前半の管理職に従事する人が大半を占め主婦は40代後半の人が多く、専業主婦が多い。平均年齢は主人50.5歳、主婦49.2歳であり、主婦の37.0%すなわち約1/3が働いている(パート・内職も含む)。地域的には東京都および神奈川、千葉、埼玉の1都3県（以後首都圏という）とそれ以外の地域（以後地方という）との比率は4対6である。

表2　住宅形態

	戸建				賃貸			分譲	
	持家	借家	給与住宅	不明	公団住宅	公営住宅	民間アパート	公団住宅	民間アパート
件数	255	0	7	1	1	3	4	2	8
%	90.55	0	2.5	0.4	0.4	1.1	1.4	0.7	2.8

表3　住宅の広さ

	0～60m²未満	60m²以上～90m²未満	90m²以上～100m²未満	100m²以上～120m²未満	120m²以上～150m²未満	150m²以上～200m²未満	200m²以上～250m²未満	250m²以上～300m²未満	300m²以上～
件数	8	42	27	43	58	42	21	16	15
%	2.8	14.9	9.6	15.3	20.6	14.9	7.5	5.7	5.3

台所空間の一考察

その1　露出しているモノの側面から

A Study of the Kitchen Space　Part 1

— Exposure of Things —

生活学科 住居学専攻

樋　口　眞　基　子

はじめに

現在、キッチンメーカー等のパンフレットやショールームにみられるようにすべてのモノが収納可能と思わせるような台所がモデル化されているものの、現実には作業台上あるいは水切棚の上にはモノが露出して置かれたままになっているのが実情である。

これまで、住居設計計画学的な見地から、モノをいかに収納すべきかを目的にモノの使用頻度数、数量、実寸法、収納されている場所等の面から実態調査をおこない、台所における標準スペース量の検討がなされ提案されてきた。しかし、現状では収納されるはずのモノが露出したままになっている台所が多い。また空間の景観を云々する場合、モノの「収納と露出」がその大きな要素であるがゆえに、収納されている状態がよいこととしてその方向に作意的にしむけられてきた傾向があったといえよう。

ところで、このように数量的、機械的、景観的に処理されようとしてきた中で、今、「収納と露出」の状態となって顕われているとするならば、この状態からモノが何故そこに存在しているかを考えてみる必要があろう。

そこで本研究は収納されずに露出しているモノに着眼して、何故露出しているかを、モノの本質的な要因か、もしくは環境的な要因によるものかどうかを追求し、台所における収納空間のあり方を再検討しようとするものである。

I　調査の目的

これまでのモノの所有量からの収納空間の追跡だけではなく、収納されずに露出しておかれているモノの量及び、その理由の因果関係の実態を把握することを目的としている。